

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：35313

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25350869

研究課題名(和文) 在宅訪問栄養食事指導に関わる管理栄養士の実践力育成のための発展的教育プログラム

研究課題名(英文) Developmental education program to nurture practical skills for registered dietitian who provide home-visit nutritional support

研究代表者

多田 賢代 (Tada, Takayo)

中国学園大学・私立大学の部局等・教授(移行)

研究者番号：30341134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：在宅訪問栄養食事指導の現状とニーズの把握のため、介護における各専門職にアンケート調査を行い、在宅で求められる栄養食事支援のコアとなる知識・スキル・行動/態度に関する教育目標を明確化し、管理栄養士養成課程における在宅栄養支援実践力を養う模擬患者(SP)演習プログラムの開発を行った。

栄養ケアプロセスに沿った評価項目に対する学生の自己効力感に焦点をあて評価したところ、学生自身が実践のための具体的な自身の課題を把握することに役立つ教育プログラムであることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：We investigated the current state and needs in home-visit nutritional support for each specialist of the home health care. And an object of education was clarified about the knowledge, the skill and the action/attitude which become a core of the nutritional care support required at home care and developed a simulation patient practice program to cultivate practical skills of home nutrition support in a registered dietitian training course. We evaluated this program by the item along the nutritional care process and made clear that it was the educational program that student oneself could find a concrete problem for practice.

研究分野：応用栄養学

キーワード：在宅栄養支援 管理栄養士養成 実践力育成 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した5年前は、在宅療養支援のニーズが高まりつつあったが、在宅訪問栄養食事指導に対する取り組みは遅れをとっていた¹⁾。ケアプラン作成の鍵を握るケアマネジャーに対して行われた調査では、在宅における栄養管理の要望はあるものの、栄養食事指導や管理栄養士の存在自体に関して認識が低いと報告されており²⁾、また管理栄養士自身も在宅訪問栄養食事指導に関する知識が少ないことが窺われる状況であった。そうした中、管理栄養士養成課程の授業において、在宅療養支援や在宅訪問栄養食事指導に関する内容が取り上げられることは少なく、実際、管理栄養士養成課程在学学生(3年次生)を対象に実施した我々の調査結果では、在宅訪問栄養食事指導に対する認識の低さ、知識不足、支援技術への不安が窺われた。そこで、学生の在宅療養支援における管理栄養士としての使命感や志気を高め、在宅療養支援や在宅訪問栄養食事指導についての効果的な実践教育方法を検討し、授業に取り入れていくことが急務と考えられた。

2. 研究の目的

在宅療養および介護予防において、他職種と協働して在宅療養者および特定高齢者の心身の健康管理に栄養・食事の面から貢献することの出来る管理栄養士を育成するための教育プログラムの開発を研究し、実践教育へと展開することを目的とした。

在宅高齢者個々人に応じた栄養ケア・マネジメントに必要な基本的知識と技術を統合させ、在宅療養者を支援する管理栄養士を育成するための教育目標を設定し、受講学生が訓練された模擬患者(療養者)を対象に栄養食事指導を行い、それを学生自身が客観的に評価する実践的トレーニングを中心とした実践教育プログラムを開発し、それをテキスト化して実際の授業に取り入れ、実践教育プログラム実施による成果を評価し、そして本プログラムの更なる改善向上を図り、管理栄養士養成における在宅療養支援教育プログラムについて探求する場を構築していくことを目的として本研究に取り組んだ。

3. 研究の方法

(1) 介護支援専門員および在宅訪問栄養食事指導を実施している管理栄養士に対する半構造化インタビューを実施し、KJ法による設問項目の抽出と整理の後、精選審査を経て設問項目を決定し、「1.全く思わない」～「5.とても思う」の5択による調査票を作成し、介護支援専門員、訪問看護師、訪問介護員、在宅訪問栄養食事指導を実施している管理栄養士に対して郵送法にて調査を実施した。

(2) 前述の調査結果をもとに、管理栄養士養成課程学生および高度専門職業人養成大学院修士学生における在宅訪問栄養食事指導

実践力向上のための教育目標を検討した。打ち立てた教育目標において、教育プログラム実施後に学生が自身で評価するための評価項目を国際標準化された栄養ケアプロセス³⁾に従い設定した。

(3) おかやまSP研究会の協力により、模擬患者(SP)としての訓練を十分に受けているSPを活用した教育プログラムおよび教育媒体の開発を行った。

(4) 開発した教育プログラムを実際に管理栄養士養成課程の授業に取り入れ、医療系大学内において取り入られている専門臨床試験OSCE(Objective Structured Clinical Examination)の手法を応用し、実践適応力について前述の評価項目に従い、SPを活用した教育プログラム実施前後において、学生自身が自己評価を行った。評価項目の質問への回答は、「実践することが難しい」「少しは(時々)実践できる」「半分程度は実践できる」「7～8割程度は実践できる」「8割以上は実践できる」の5段階から選択させ、「実践することが難しい」1点から「8割以上は実践できる」5点に得点化した。また、SPを活用した教育プログラム実施前の合計点を四分位により低得点群を「Q1」、高得点群を「Q3」として3群に層別した。SPを活用した教育プログラム実施後の評価記入用紙には、意見・感想を記入する自由記述欄を設けた。これらの結果より、本教育プログラムの成果を評価した。

(5) 本教育プログラムに関する情報発信を行い、さらなる改善向上を図るべく、教育プログラム探求の機会や場を求めた。

4. 研究成果

(1) 在宅療養者を支援する管理栄養士育成における教育目標を模索するために、在宅療養支援に携わる訪問看護師、介護支援専門員、訪問介護員を対象として、管理栄養士が行う在宅栄養支援として必要と思う事項や技能を問う調査を実施したところ、その結果、在宅栄養支援として必要と思われる事項12項目のうち、「利用者本人が、栄養・食事改善について理解できるよう説明をする」「疾病予防・治療に関する基本的知識(臨床栄養学)に基づき情報提供を行う」「各利用者に応じた調理方法を調理担当者やヘルパーに分かり易く伝達する」「食材の選び方、新しい食品の紹介など食に関する情報を提供する」「栄養支援により得た情報を記録し、他職種へ正確に伝達する」において、全ての職種が「とても思う」「少し思う」と半数以上回答した。

また、在宅療養者に対する栄養支援に対する自由記載形式の任意回答についてテキストマイニング分析を行った結果、管理栄養士に求める技術・能力では他職種からは「利用

者」「コミュニケーション」「指導」「合わせる」「調理方法」「提案する」「生活」が、管理栄養士では「コミュニケーション」「利用者」「食支援の専門知識技術」が挙げられた。

(2) 前述の調査結果より、他職種から利用者の家族や生活に合わせた食支援が求められていることが示唆され、他職種の重視する視点を踏まえ、管理栄養士のもつ専門的知識や技術を対象者に必要な支援に活かしていく教育目標にそった評価項目を検討した。

栄養ケアプロセスを基盤におき、「A. 医療倫理と対人スキル」「B. 記録、プレゼンテーション」「C. 医療（介護）チームの一員での役割」「D. 栄養アセスメント」「E. 栄養診断」「F. 栄養管理計画・栄養介入」「G. モニタリングと評価能力」の7つの学習分類を設け、1つの学習分類あたり2～6問、総計25問の評価項目を設定した。

(3) 教育プログラムは、次の流れで開発、実施を行った。まず、在宅栄養支援を必要とする療養者の事例を3～4題設定し、各事例の病態、栄養状態、食生活状況などのプロフィールを作成し、おかやまSP研究会のSPと事前に十分な打ち合わせを行った。事前として、受講学生にもプロフィールを配布し、各自で栄養アセスメント、栄養計画をあらかじめ行えるようにした。そして、授業当日、受講学生をグループに分け、グループ毎に事例別の場面設定に別れ、その場で管理栄養士役の学生を指名し、グループ内の残りの学生が観察者、教員がファシリテータを担った。SPに対する8～10分の模擬面接の実施、15分程度のフィードバック、次の場面への移動、～を繰り返し、学生全員が模擬面接を実施した後、事後として全体へのフィードバックを行い、プログラムを進行しながら同時に各事例の記録もとるようにした。SPを活用した教育プログラムは、以上のとおり事前、SPに対する模擬面接、事後の3部構成とした。

(4) 管理栄養士養成課程3年次生90人に対し、SPを活用した教育プログラム実施前後における学生の自己効力感に着目した前述の評価を行った結果、「A. 医療倫理と対人スキル」「D. 栄養アセスメント」「F. 栄養管理計画・栄養介入」および合計点において有意な増加がみられた。また、合計点の四分位による3群の層別において教育プログラム前後における自己効力感についての得点の変化をみたところ、図は「A. 医療倫理と対人スキル」の学習分類における変化を示したが、7つの学習分類全てにおいて、「Q1」は教育プログラム実施後に実施前より得点増加がみられ、「Q3」は得点減少がみられた。

「Q1」に「自信が持てた」、「Q2」「Q3」に「自分に足りないところがよくわかった」との記述がみられ、本教育プログラムにより学習の動機づけや気づきを引き出し、実践的

な在宅栄養支援トレーニングに繋がると考えられた。

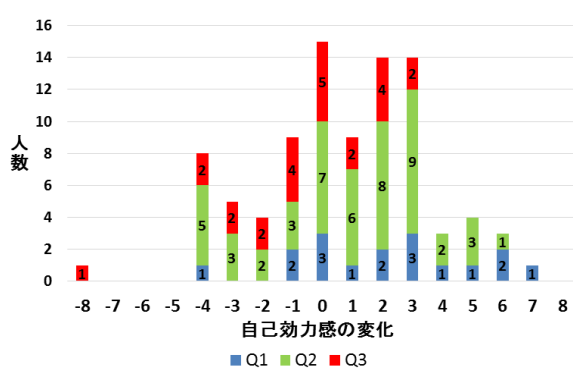


図 学習分類 A における受講学生個人および四分位の自己効力感の得点変化の頻度分布

(5) 本教育プログラムについて、第61回日本栄養改善学会学術総会研究自由集会、第4回日本栄養学教育学会学術総会でのラウンドテーブル形式の発表などの場において、広く意見を聴取した。また、本プログラムに基づいた実習方法のテキスト化を行った。

< 引用文献 >

- 田中弥生、在宅訪問栄養食事指導の重要性・方向性、日本栄養士会雑誌、54巻10号、2010、4-5
- 為房恭子他、在宅療養者の訪問栄養食事指導の実態とその課題（第2報）、武庫川女子大学紀要（自然科学）、57巻、2009、33-37
- 公益社団法人 日本栄養士会 監訳、国際標準化のための栄養ケアプロセス用語マニュアル、第一出版株式会社、2012、1-9

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- Tada Takayo, Moritoshi Paul, Sato Kanae, Kawakami Takayo, Kawakami Yuko, Effect of Simulated Patient Practice on the Self-Efficacy of Japanese Undergraduate Dietitians in Nutrition Care Process Skills, Journal of Nutrition Education and Behavior, 査読有、Vol.50、2018、pp. 610-619、DOI: org/10.1016/j.jneb.2017.12.013 <https://authors.elsevier.com/c/1XAw85KxDNbk8p>

佐藤香苗、多田賢代、川上貴代、管理栄養士養成課程における在宅栄養支援教育に対するビデオ学習の効果～学生の自己効力感に焦点をあてて～、Health Sciences、査読有、29巻、2013、85-94

〔学会発表〕(計15件)

川上貴代、平松智子、田淵真愉美、多田賢代、在宅での栄養食事支援システムに関する研究、OPU フォーラム 2018、2018、岡山県立大学

多田賢代、川上貴代、佐藤香苗、在宅栄養支援教育における模擬患者導入の効果～学生の自己効力感に着目して～、日本食生活学会第55回大会、2017、天使大学

Takayo Tada、Kanae Sato、Takayo Kawakami、Yuko Kawakami、The Learning Outcomes of Simulated Patient Practice with Undergraduates on a Registered Dietician Training Course in Education on Nutrition Support for Frail Elderly Living in the Community、17th International Congress of Dietetics、2016、Granada, Spain

多田賢代、川上貴代、佐藤香苗、管理栄養士養成課程において在宅栄養支援教育をいかに進めるか、第4回日本栄養学教育学会学術総会、2015、福岡国際会議場

川上貴代、多田賢代、森恵子、佐藤香苗、在宅栄養支援に対する管理栄養士および他職種の認識、第62回日本栄養改善学会学術総会、2015年、福岡国際会議場

多田賢代、管理栄養士養成課程における模擬患者演習の効果と課題、中四国模擬患者スキルアップセミナー(招待講演)、2014、地域医療人育成センターおかやま

多田賢代、竹内ひとみ、松下暢子、佐藤香苗、森恵子、在宅における「栄養・食生活支援活動」に関する課題と方策の検討(第二報)、第73回日本公衆衛生学会総会、2014、栃木県総合文化センター

森恵子、竹内ひとみ、松下暢子、多田賢代、在宅における「栄養・食生活支援活動」に関する課題と方策の検討(第一報)、第73回日本公衆衛生学会総会、2014、栃木県総合文化センター

多田賢代、佐藤香苗、川上貴代、在宅栄養支援教育における学習方法と効果についての検討～学生の自己効力感に焦点をあてて～、第61回日本栄養改善学会学術総会、2014、パシフィコ横浜

佐藤香苗、看護・栄養学修士課程修了生に共通するコンピテンシーとは?、第61回日本栄養改善学会学術総会研究自由集会、2014、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター

多田賢代、在宅栄養教育力を高める SP 演習～岡山県栄養ケアステーションにおける取り組みから～、第61回日本栄養改善学会学術総会研究自由集会、2014、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター

川上貴代、管理栄養士教育に SP 演習・OSCE を導入する意義、第61回日本栄養改善学会学術総会研究自由集会、2014、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター

多田賢代、佐藤香苗、川上貴代、川上祐子、在宅栄養支援教育における模擬患者を用いた演習効果～学生の自己効力感に焦点をあてて(第2報)～、第60回日本栄養改善学会学術総会、2013、神戸国際会議場

川上貴代、佐藤香苗、多田賢代、在宅栄養支援教育におけるビデオ学習の効果～学生の自己効力感に焦点をあてて(第1報)～、第60回日本栄養改善学会学術総会、2013、神戸国際会議場

多田賢代、佐藤香苗、川上貴代、管理栄養士養成課程における在宅栄養支援教育に関する教育方法の検討～学生の自己効力感に焦点をあてて～、日本健康科学学会第29回学術大会、2013、国立オリンピック記念青少年総合センター

〔図書〕(計1件)

多田賢代(編者: 佐藤香苗)他、株式会社建帛社、マスター栄養教育論実習、2016、83-91、113-122

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

多田 賢代 (TADA, Takayo)
中国学園大学・現代生活学部・教授
研究者番号：30341134

(2) 研究分担者

川上 貴代 (KAWAKAMI, Takayo)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：10254567

佐藤 香苗 (SATO, Kanae)
天使大学・看護栄養学部・教授
研究者番号：40405642

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

川上 祐子 (KAWAKAMI, Yuko)
森年 ポール (MORITOSHI, Paul)